印象派の筆触（タッチ）
ーゴッホ／モネ／セザンヌから学ぶ表現方法ー

保富仁之（和歌山県立田辺高等学校）
笠原　彩（和歌山大学教育学部附属小学校）
松下裕美（阪南市立飯の峯中学校）

題材コンセプト

○ 絵画表現の様式を追体験的に学ばせることにより、その様式に特徴的な表現の方法を知的に理解させる題材である。さらに、この理解から生まれる新たな解釈や自己表現に繋がる可能性を孕んだ題材でもある。この題材の指導においては、単なる様式の模倣に陥らないことが肝要である。

○ 一つの絵画様式ーここでは印象派ーをテーマとして取り上げ、印象派の特徴的な表現形式である筆触（タッチ）に焦点を当てて、生徒の知的発達段階を考慮しながらその表現の方法を理解させる。

○ これらの題材は児童や生徒の知的発達段階に沿いながら一つのシークエンスを作りだす。

1．題材について［題材観］

西洋絵画の様式を考える際、印象派は一つの大きな絵画様式として捉えることができる。彼らの表現形式の大きな特徴は、その筆触（タッチ）にある。そのため、彼らの筆触を学ぶことが印象派の表現形式を理解するうえで重要な要素となる。

この実践で取り上げる**3**つの題材では、「印象派の筆触」について、小学校ー第**4**学年ーではゴッホを、中学校ー第**2**学年ーではモネを、高校ー第**2**学年ーではセザンヌを取り上げ、生徒の知的発達段階を考慮しながら表現の方法を理解させる一つのシークエンスを形成する。さらに、これらの題材によって印象派の表現形式を理解させることが、印象派以前の古典的絵画表現における遠近法や陰影法を再認識させるとともに、セザンヌ以降のキュビスムや現代美術への理解を促すきっかけとなろう。

2．学習目標

〈ゴッホさんになって描いてみよう！〉

(1) ゴッホ特有のタッチや色遣いに気づき、作品づくりに生かして楽しみながら取り組む。

(2) 表したいイメージにゴッホ風タッチを生かすために線や色など考えていろいろ試す。

(3) 表したいイメージに合うようにパスでできるゴッホ風のタッチの線や色の塗り重ねなどを工夫する。

(4) 自分の作品や友だちの作品のよさに気づいて思いを伝え合う。

〈光と影　モネのタッチに学ぶ〉

(1) モネの作品や筆触分割の技法に興味を持ち、意欲的な態度で制作に取り組む。

(2) モネの表現技法を理解し、モネのタッチに合った〈光と影の風景〉を考え、探し、表現する。

(3) 活動を通してモネのタッチで色を重ねていく感覚をつかみながら、自分の絵画表現に生かす。

(4) モネの作品、模写、自作を鑑賞し、活動を通して学んだことや習得したことについて自己評価する。

〈セザンヌのリンゴを描こう〉

(1) セザンヌの表現方法に興味を持ち、意欲的な態度で鑑賞や表現に取り組む。**[興味・関心]**

(2) 彼の表現形式を理解し、工夫、展開しながら自己表現に応用できる。**[発想・構想]**

(3) 彼の表現形式に注意を払いながら、作品製作において応用的な絵画表現をする。**[創造的技能]**

(4) セザンヌの表現方法について歴史的・造形的視点から理解を深める。**[鑑賞]**

※以下、それぞれの題材における「学習の流れ・指導計画」、「指導のポイント・学びのフォーカス」、「鑑賞と評価」を示す。

ーゴッホさんになって描いてみよう！ぐるぐるの絵ー

笠原　彩（和歌山大学教育学部附属小学校）

3．学習の流れ・指導計画（第4学年）

■**第一次**：ゴッホさんの絵をみよう。

『ゴッホの絵本ーうずまき　ぐるぐる』（小学館,1993）で、『星月夜』や『糸杉』などの絵を鑑賞する。

■**第二次**：『糸杉』を模写しよう。

タッチがうっすらと写った『糸杉』の **A4** 白黒コピーの上に、パスで塗り絵をする。

■**第三次**：ゴッホさんになって描こう。

模写でのタッチを思い出しながら、パスとキャンバス地画用紙に描く。

■**第四次**：「小さなゴッホたち」の展覧会。

4.指導のポイント・学びのフォーカス

○ ゴッホ作品の鑑賞では、ぐるぐると渦を巻く、絵の具をたっぷりと使った力強いタッチに気づかせたい。子どもからは「風が吹いているみたい」等の発言もありゴッホの筆遣いとの出会いが感じられた。

○ 厚塗り油彩のタッチを小学生に模写で理解させるために、短い線を重ねたり継いだりして色面を作っていること、タッチの方向や形が大切なこと、パスの塗り重ねで油彩の表現に近づけることを特に留意する。

○ 自由課題では模写でのタッチの描き方を思い出しながら「ゴッホになって」を意識させる。『糸杉』のカラーコピーや投影機での呈示も有効であった。

5．鑑賞と批評

作品 **A** は、ゴッホの「ぐるぐる」タッチから、丸いバラの花の形と花びらの重なりをイメージして表現している。

作品 **B** は、パスを叩き付けてゴッホの力強いタッチを再現した。画用紙のキャンバス地が生かされている作品だ。

作品 **A**：和歌山大学教育学部附属小学校 **4** 年生

作品 **B**：和歌山大学教育学部附属小学校 **4** 年生

作品 **C** は、直線的で長い線のタッチ。タッチの方向や色を塗り重ねて表現している。

子どもとゴッホのタッチとの出会いは新鮮であったようだ。一生懸命ゴッホになろうと画用紙に向かっている姿が印象的であった。

作品 **C**：和歌山大学教育学部附属小学校 **4** 年生

ー光と影　モネのタッチに学ぶー

松下裕美（阪南市立飯の峯中学校）

3．学習の流れ・指導計画（第 2 学年）

■**第一次**：モネの作品を鑑賞、模写。

光の印象を写し取ろうとした『印象・日の出』や『睡蓮』、「積みわらシリーズ」など、モネ作品を鑑賞。筆を握る手の動きが伝わる筆触、幾重にも重ねられた硬い筆のかさかさとした質感、光と影の表現などに着眼して細部を観察。「積みわら」の部分を拡大し手の動きをイメージしながら模写する。

①阪南市立飯の峯中学校 2 年生　指導：松下裕美，2012

■**第二次**：光と影のある風景画制作。

モネのタッチに学んだ風景画を制作する。光と影を描くのに適した風景を校内で探し、スケッチ。淡い色で下塗りの上に、乾いたタッチを重ねていく。

■**第三次**：鑑賞・自己評価。

模写と自作を並べて鑑賞。学んだタッチを自作に生かせたかを見る。

4.指導のポイント・学びのフォーカス

○ 第一次の鑑賞では、筆跡から想像しながら実際に紙の上で筆を動かしてみるなど、モネの感覚的な手の動きをイメージさせるような工夫が必要である。筆をやわらかく持つように指導した。筆は硬めの平筆がよいようだ。油彩画のように色を重るためにはアクリル絵の具が適している。

○ 固有色から離れ、黒を使わずに、画面上で色をぶつけあうモネの色彩の手法は別に指導は要るようだ。

5．鑑賞と批評

全体を通して生徒たちは楽しみながら活動し、それぞれにモネの技法を習得しようと意欲的であった。

↑③
←②

阪南市立飯の峯中学校 2 年生　指導：松下裕美，2012

図版の①と②、③は同一の生徒の作品である。①で色を重ねていく感覚をつかみ、風景画に生かせた。②を描き終え、もう一枚と取り組んだのが③。モネのタッチとは離れたが、①、②で習得した筆づかいを消化し、発展させた。

④の生徒は、はじめは小筆で細かく点を敷き詰めていたが（右端の木の部分）、制作途中でモネの細部を再度確認し取り組んだ。モネのタッチを学んでいく過程がみられた。

今回は〈光と影〉をテーマに掲げたため、影の描法や色づくりに意識が偏ったようだ。光と影の表現技法としての〈タッチ〉＝筆触分割に意識を向けさせる必要があった。

④阪南市立飯の峯中学校 2 年生指導：松下裕美，2012

ーセザンヌのリンゴを描こうー

保富仁之（和歌山県立田辺高等学校）

3．学習の流れ・指導計画（高校 2 年生）

■**第一次**：導入の鑑賞；セザンヌ作品の特徴を理解する。（**2.0** 時間）　※「指導のポイント」に注意

■**第二次**：彼の特徴的な技法ー多視点・線による表現・彩色の方法等ーについて、リンゴを描きながら追体験する。（**2.0** 時間）

■**第三次**：彼の技法を応用しながらアクリル絵の具でリンゴを描く。（**5.0** 時間）

・鉛筆で多視点を意識したスケッチを行い、寒色で大まかな陰影をつける。

・暖色でリンゴを中心に彩色する。セザンヌ作品の特徴を意識し存在感を出すように工夫する。

・寒色系 **4** 色、暖色系 **5** 色の計 **9** 色を自由に混色しながら、作品細部の描き込みに入る。常に、セザンヌ作品の特徴を意識しながら彩色を進める。

■**第四次**：学習内容を振り返りながら、ワークシートによって製作活動のまとめをする。（**1.0** 時間）

4．指導のポイント・学習のフォーカス

○ セザンヌの筆触は、水彩画にその根源を見ることができるため、本題材では水彩画に焦点を当てた。

○ 「学習の流れ」の第一次で指導するポイント

〈生徒との対話から引き出す内容〉

・複数の視点から見た表現

・規則的な筆触（タッチ）による均一な描写

・基本的な幾何学形態への対象の還元

〈指導によって理解を深める内容〉

・形態の独特なデフォルメ

・視点の変化による形態や色彩の漸次移行

・画面にヴォリュームをあたえる方法

○ 「学習の流れ」の第二次では、セザンヌの **3** 種の線、すなわち「浮遊する線」、「強調のための線」、「多数の並列する線」について理解を深めさせる。

5．鑑賞と批評

今回の実践で、セザンヌの表現方法に対する生徒の知的理解は深まったと考えられる。生徒達は、主体的な態度で彼の表現方法を応用しようとした。今後の課題は、多視点の構図をもっと意識させやすい方法、例えば、皿を画面に入れる等の工夫である。

※図版は田辺高校 **2** 年生の同一生徒による製作過程である。